

巻 頭 言

広島大学大学院教育学研究科の改組により、現在の学習開発学講座になって、今年度末で11年目を終える。「学び」をキーワードに、児童生徒をはじめ幼児から高齢者まで幅広く対象とし、また、日本と諸外国を結んで、従来の教育に関連する専門科学の狭い枠組みからの脱却を図って諸科学相互の統合に努めてきたと、10年という区切りを迎えて、前号では振り返ったところである。また、新しい学習科学の確立を志向して着実な歩みを続けてきたとも総括した。しかし、果たしてそうであったのかと、平成23年3月11日金曜日を境に考えさせられている。

この日、日本は未曾有の大災害に見舞われたのは周知の通りである。マグニチュード9.0の大地震、時間をおかず襲来した大津波、そしてその後に分かった福島第一原発の事故。その被害は未だ全容が明らかになっていない。この東日本大震災において犠牲となられた方々のご冥福をお祈りしたいという気持ちは、日本国民全員の一致した思いであろう。また、避難所等で不自由な生活を強いられている被災者の方々が安全で安心な暮らしを取り戻すまでには時間がかかり必要とされると予想されるところであり、どのような手だてが今後必要とされるのか、日本国民には大きな課題が突きつけられている。

一度このような未曾有の事態に直面して、「学び」をキーワードに新しい学習科学の確立とはいかなるものであるのか、改めて考えさせられたのである。今回の第4号にあっては、我々の志向してきた学習科学の確立に向けた従来の視座からの論考であることは否めない。本講座の研究理念である「学習」「教育」「国際性」「発達」をより鮮明に、生涯学習社会における「学び」のあり方を情報発信することによって、我々を取り巻く教育環境の将来展望を拓いていくことに努めたものである。しかし、今後さらにその「学び」が何に応えるものであるのか、「学び」が真の「幸せな生」と対峙できるのか、真摯に問い続けることがこれまで以上に求められていることは違いないであろうと思う。本研究紀要が、今まさに突きつけられている日本国民に対する課題に応える学習科学の確立に寄与することを願い、新しい学習科学の確立に多くの同士が集うものとなることを祈念したい。

この研究紀要や編集主体の学習開発学講座の発展には、多くの方々のご指導が必要である。広くご意見、ご批判を賜れば幸いである。

平成23年3月

広島大学大学院教育学研究科
学習開発学講座主任 林 孝